

「茨木版共創」の考察資料

(1) ヒアリング考察の結果

令和6年度に実施した共創企画（パイロット企画）の参加者に対して実施したヒアリング結果を以下にまとめています。

大項目	小項目	内容
参加者	様々な職種や組織などからの参加	普段の生活や仕事では出会わない人たち同士の関わりから、わくわくする共創の取り組みが生まれる。またそこでの出会いから逆に日々の生活や仕事で関係性が活かされていくことがある。
	自分のバックグラウンドを活かすも活かさないも自由	自分の仕事に関連する領域で参加している人もいれば、まったく関係なく参加している人もいる。一個人として楽しく参加する形もあれば、仕事で得た自分の強みを活かして参加する形もあり、それぞれの参加の仕方を否定することなく、参加者が自由に選択できる形が望ましい。
	途中からでも参加しやすい雰囲気づくり	共創の取り組みにおいては、途中から参加する主体がいることで、障壁をブレイクスルーするきっかけになったり、新たな方針が見いだせたりすることがある。
意見交換の場	課題解決だけではない	自分たちの興味のあること、やってみたいことなど楽しいと思えることが活動を継続する上では大切な要因である。ただし、楽しいだけではなく、社会にためになること、自分の生活や仕事に役立つなど社会的意義も大切な要素である。
	おにクルのような多機能な施設を活用	企画づくりを進める上で、書籍を調べたり、アンケートをとったりと様々な形での情報収集が必要となる。おにクルのように図書館が入っていたり、キッチンスペース、会議スペースなど様々な昨日を兼ね備えた場所で開催することで、共創の取り組みが前進することがある。
	Yes, and で進める	意見交換の場では、様々な立場の人たちが参加していることから、相手の意見を否定せず、むしろ便乗することで企画がよりおもしろくなることもある。参加者一人ひとりが自分が参加しているということを実感できる話し合いの場づくりが必要である。
	話し合った結果を残す	参加者に現役世代が多いと、話し合いの場に仕事や家庭の事情で参加できない場合がある。話し合いに参加していないことで置いてきぼりにならないように、きちんと話し合いの結果を共有することが大切である。議事録や写真を共有するなど無理なくできることをすることで、参加率を維持することができる。
企画づくり	実際にやってみることが大切	話し合いをしているだけではなく、考えたことを実行することが大切であり、そこからの学びが大きい。最初から大掛かりなことをするのではなく、まずは小さくお試しすることで無理なく最大の学びを得ることができる。
ふりかえり	ふりかえりの時間をとる	企画をやってやりっぱなしにせず、ふりかえりシートに記入するなど、自分たちの活動を客観的にふりかえる時間が大切である。ふりかえりの機会をつくることで次への活動に向けた機運を高めることができる。
大学や事業者の参加の促進	あらかじめテーマ設定が必要	大学や事業者の参加を促すためには、あらかじめ共創で取り組むテーマ設定が必要である。役割などが明確であれば参加しやすくなることから、大学や事業者に何を求めているのかなどをより具体的に提示できるとよい。

(2) 「茨木版共創」の特徴のキーワード

共創企画（パイロット企画）の実施により、「茨木版共創」の特徴と考えられる事項を以下の通り整理しています。

■過程が大切

共創の取り組みは結果よりもそこに向かう過程が大切。自分自身が楽しみながら、仲間同士で共にした時間や経験が何よりの成果。当初設定したテーマが少しずつ変化していてもよい。

■やってみる

今回の事業でも発表する、小さくお試しすることで得られる気付きがたくさんある。最初から大きなことをしようとしなくてもいい。小さくお試しから始めることが大切。

■試行錯誤

共創の取り組みに失敗はない。試行錯誤する過程が何より大切。一人ではできないことも、メンバーで力をあわせればできることは広がる。

■学び合う

一人で知識や経験を積み重ねるのではなく、仲間と一緒に学び合うことが大切。誰かに話を聞いたり、自分で調べてみたり、今まで知らないことを様々な視点からとらえることでより学びが深くなる。

■感謝の気持ち

相手を否定しない、相手を尊重することでできること、取り組みの可能性が広がっていく。仕事をしながら、家庭のこともある中での活動なので、参加できる人が参加し、やれる人がやる。その代わりちゃんと取り組みが追いかけられるようにする。

■自分ごと化

お客さんのように参加すると楽しさは半減。一人ひとりが主体的に参加し、自分にできることを仲間と相談しながらどんどんやっていく、自分から進んで動くことが大切。だから誰かのやりたいでも自分ごと化するといつの間にか自分のやりたいことになっている。

■開いた参加

共創の取り組みはいつでもどのタイミングでも参加できる柔軟さが必要。チームとしてできあがりすぎてしまうと、途中参加しづらくなる。途中参加があるからこそ、よりよい取り組みに発展する可能性がある。

■つながりを増やす

共創をきっかけにつながった関係性は、自分自身の仕事や生活などでも生きてくる。まちなかやおにクルの中で、会って話をするが増えたり、新しいチャレンジにつながりを活かしていこう。

■つながりを活かす

それぞれが持つ人つながりがある。共創の取り組みでは、個人のつながりをチームのつながりにすることで、活動がより広がったり、新たな視点が加わった活動に展開していくこともある。